

---

# インモータルツ!!

小元 数乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インモータルツ！！

### 【Nコード】

N3692Y

### 【作者名】

小元 数乃

### 【あらすじ】

とある異世界にいる四人の少年少女が《不死者》に至るまでの物語

第一部・魔法が使えない欠陥魔法使いの少年が、超能力者だらけの国に留学生として放り込まれる！？ しかもそれは、ある人物が企んだ壮大な計画のための布石で……。

残りの話は、第一部が完結ししだい追加していきます。

## プロローグ（前書き）

ほかにも小説かかえてんのに何やってんの？

と言われそうではありますが……あえていわせてもらうと、こっ  
ちを本職にしたいんですよー

時間が空いたときにしか更新しないので、かなりの亀更新となり  
ます。あしからず（<ー>）

## プロローグ

モクモクと上がる灰色の煙。シャッターは無残に吹き飛び、がれきの山が入り口をふさいでる銀行。それを見て騒然としている野次馬たちを、紺色の制服を着た警官たちが何とか抑えている。

「状況は？」

そんなやじ馬たちを何とか切り抜け、けたたましい音を鳴らしながら止まったのは警察専用車両。そこから降りてきたのは高校生ぐらいの少女だった。

「最悪です……。なぜだかはわかりませんが、銀行が爆発しました」

現場で特殊なスーツを着てライフルを持っていた特殊警察の報告を聞き、その少女は思わず眉をしかめる。

ここは学園国家『日ノ本』の巨大学園都市の一つ『第六学園都市』内のとある銀行。さっきまで銀行強盗＆立てこもり事件現場だったところである。犯人グループは十二人の連携プレーにより瞬く間に銀行を占拠。銀行員十数名を含む、52人の人質を取り警察に逃走用の車を要求してきたのだ。

そこで呼ばれたのが彼女。この学園国家『日ノ本』の治安を守る『クラス4』。戦略級超能力者が揃えられた武装警察組織『法律』であつたのだが。

その彼女が到着する前に事件は終わってしまった。人質もろとも犯人が爆死するというとんでもない事態によって。

「どうして犯人は爆死なんか……。逃走用の車を要求していたのだ  
ったら、死ぬつもりはなかったんでしょ？」

「わかりません……。いま他の班が入って現場検証を行おうと  
しているところ……」

悲しそうに顔を伏せる少女に警察官が更なる状況説明をしようと  
したときだった！

銀行内部から、雷を纏った独鈷杵が飛び出してきて、銀行の出入  
り口をふさいでいた瓦礫を瞬時に吹き飛ばした！！

「「なっ！？」」

少女と警察官が固まってその光景を見守る中、錫杖を持った少年  
が二人の仲間と共に、残った瓦礫を押しの数十人もの人質を抱え  
ながら銀行内部から出てきた。

「シシンの野郎……。後始末全部おれたちに任せてトンスラこきや  
がった！！」

「むしろ彼が手伝ってくれただけでも行幸よ。いつもは逃げ回って  
ばかりなんだから……」

「しかし。しかもうちよつと『すまあと』な解決方法はなかった  
ものか？ おかげで生き埋めになりかけたではないか……」

黒髪に茶色い瞳を持った彼らは、口々にそんなことを言いながら  
次々と銀行内部から人質を運びだし、外で呆けていた警察に彼らを

手渡していく。

「ほらよ。さっきまで極限状態にいたんだ。あんま手荒なまねはすんなよ」

「あ、はい!!」

リーダー格と思われる錫杖を持った少年からそう言われ、手渡された少女をしっかりと抱え直し、一人の警官が敬礼をする。

その光景を見て、ほかの警察たちもようやく意識が帰ってきたのか銀行内から運び出されてくる人質や、ぐるぐる巻きにされ気絶している銀行強盗達に駆け寄っていた。

「また魔法使いかれらね……」

「魔法使いがこっちに来てからは助けられっぱなしですね。それに犯人もろとも死亡というのも我々の早とちりだったみたいで……」

苦笑を浮かべて肩を竦める少女に、警察官は無線を取り、苦笑を返しながらそう言った。

「ほんと……彼らもう《法律ルール》に入ればいいのに」

「それはだめよ……だって彼らは」

少女はそこで言葉を切り野次馬の中に視線を走らせる。そして有象無象の野次馬の中から、ボロボロになった和服に閉口しながら人ごみの中に消えていく銀髪の少年を見つけた。

「留学生なんだもの」

少年はガリガリと頭をかきながら、輪ゴムを使つて腰まである長髪を肩あたりでまとめ直す。そして、事件現場を振り向き、少女と目が合っていることに気付くと『ゲッ！』といわんばかりの表情をしてすたこらサッサと逃げていった。そんな少年の後ろ姿に、少女はため息をつくのだった。

## 1話

『昨日起きた銀行立てこもり事件を解決したのは、またあの《魔法大陸》天草からやってきた勇敢な留学生の方々でした。これらから留学してきてから解決した事件は20件を超えましたね』

『いやゝ。まったく頼りになる子たちですよ。まさしく《魔法使い》といった感じですね。今のところ彼らはいずれ故郷に帰る人間ということで《法律<sup>ルール</sup>》入所は見送られています。次の国家間交渉で彼らの《法律<sup>ルール</sup>》入りが許可されるかもしれないという噂もありますし……今後の彼らの活躍に期待したいですね!!』

むやみやたらにハイテンションな声で、留学生を賛美するテレビ画面内のナレーターたち。彼らを三白眼で睨みながら松壊<sup>しょうかい</sup>シシンはリモコンを操作し、テレビの電源を切った。

ごくごく一般的な2LDKの学生寮の室内には、無数の段ボールが積まれておりシシンがここに来てまだ間もないことを示している。

こいつら、俺らが留学してきたときには『魔法なんて……はっ！ 非科学的ですよゝ。げらげらゝ』とか言つとつたのにえらい掌返しよつたなゝ。

といわんばかりの表情をしながら、シシンは朝食に使った紙製の食器たちをごみ箱に捨て、食卓の近くに設置してある安物の輪ゴムが入った箱の中に手をつっ込んだ。

六つの魔法と一つの奇跡が支配する《魔法大陸》天草から、六つの都市と一つの財閥が支配する《学園国家》日ノ本にシシンが留学



してから早一週間がたった。今のところ彼は、彼の友人たちが遭遇したような、ブラウン管に映るような非日常的な事件に遭遇したことはなく平和な生活を送っていた。表向きには……ではあるが。

ただでさえ悪目立ちする容姿しとるんや。これ以上目立ってたまるかいな。

そう思いながら、彼は鏡に映る自分の姿に嘆息した。

白銀の長髪に、血のように赤い瞳。肌は抜けるような……というか白いペンキでもぶっかけられたんじゃないの？　といわんばかりに白く、ともすれば病的な印象を受けてしまう。日ノ本ではアルビノと呼ばれる色素異常だそうだ。天草にいたころは『小麦色の肌を俺にくれ』と日光浴を一日中していたのだが、結局肌がひりひりしただけで色が変わることはついぞなかった。おまけに、それを聞いた彼の主治医が、ものすごい勢いで怒ってきたのもう二度とやらないことを心に誓っている。

そんな色素が抜けた容姿は天草や日ノ本でも非常に珍しく、いろいろと質問攻めにあってしまっただが、いまは懐かしい昔話だ。

「まったく……。うちの一族はホンマ難儀なみためしとんで。こんな容姿を授けた親父を呪い殺したるか？」

まあ、そんなんできたら苦労し〜ひんけど。と、呟きながら、シンは腰まで届く長い銀髪を、先ほど箱からつかみ取った輪ゴムを使い肩のあたりでまとめながら台所に向かう。髪をまとめる道具が輪ゴムのところを見ると、あまり見た目には気を使わないたちのようだ。着ている服は制服。一般的な黒の詰襟。シンは色の中では黒い好みなので、この国では野暮ったいといわれ絶滅しつつあるこ

の制服に喜んで袖を通している。

シシンはガスの元栓がしまっているのを確認。流しにおいてあった弁当を引っ掴み、台所に立てかけるように置いてあった鞆の中に放り込む。

「ほな、そろそろ時間やし……いつてくるわ」

誰もいない学生寮の一室に、一人さびしく挨拶をしながらシシンは靴を履き部屋を飛び出す。

本日の日時は5月10日。一週間の入学研修を終え、松壊シシンは初めて、高校へと登校する。

## 2話（前書き）

うちの主人公は関西弁です……

## 2 話

「幸<sup>さいさき</sup>先ええスタートを切れた！　と思たんやけどな……」

なんでこんなことになつとんねん……。

シシンは自分の腕を凄まじい形相でひねり上げる、きれいな桃色の髪を惜しげもなく刈りベリーショートにした美少女に嘆息しつつ、今の状況を再確認する。

現在シシンは電車の中。学生や教師、研究員などで込み合う満員電車。そこにシシンはいた。ポケットに手を入れた男が奥の車両に移ろうとも思っただのか、肩で人の波をかき分けながら通り過ぎる。それを迷惑に思いつつも、シシンは初登校に心躍らせ『友達百人作つたるわ』と、いまだき小学生でも抱かないような目標を冗談半分に立てていた。

そんなとき、突然人ごみの中から怒声とともに手が伸びてきた。そして、その手によってシシンの腕がひねり上げられ……今に至る。

「うん……。意味不明や」

いったい俺が何したちゅーねん！？

いろいろと理不尽すぎるこの状況に嘆きつつ、シシンはとりあえず自分の腕をひねり上げる桃色短髪の少女に話をしてくれるように懇願することにした。

「あの……俺なんかしましたか？」

「何をぬけぬけと……この痴漢!!」

痴漢。痴れる漢。おこ 女性に性的嫌がらせを働く不埒もの。最低の犯罪の一つ。

「つて、待てや、コラ!! はあ!? 痴漢!? そんなんしてへんわ、ハゲ!!」

「なっ!? 誰がはげよ!!」

ああ、しもた!? ついいつもの癖で!?

何やら取り返しのつかない失敗をしてしまうシシン。事態は刻々と悪化の一途をたどり、とうとう電車内にまで広がる。

「おい……痴漢だつてよ」

「やだ、こわい」

「あいつ、見たことない奴だし……マジで痴漢なのか」

周りから聞こえてくる疑惑の声。もう初っ端から学校生活に躓くどころか、そのまま監獄生活に直行してしまいそんな勢いである。

「うわ。どないしょ……」

「最近友達がこの時間帯の電車で被害にあっているから、さっきそこで網はっていたんだけど……やっぱりかったわね!!」

そういつてさほど離れていない電車の出口を指差し少女はにやりと笑う。

しかし、シシンにとってその少女の言葉は一筋の光明だった！！

「ん？」

あり？

ああ……この子、痴漢の常習犯を捕まえようとしたんか。つて、

「はあ！？ 俺が痴漢の常習犯やと思とんのか！！」

「そうよ！！ ここ最近の２３件の痴漢事件は全部あんたの仕業でしょ！！ 現行犯なんだから言い逃れはできないわよ！！」

「現行犯もクソも人違いやボケ！！ 俺は今日学校に編入するために初めてこの電車に乗ったんやぞ！！」

え？ シシンの怒声に少女の自信にあふれた表情が固まる。

「く、苦しい言い逃れね！！ そう言うんだったら証拠見せなさいよ！！」

「ん」

冷や汗をダラダラ流しながら、それでも高圧的に命令をしてくる少女に向かってシシンは無言で一冊の手帳を取り出した。黒い表紙に『特別留学生』の五文字が金色の意図で刺繍されている手帳を…

…。そして、今朝のニュースで大々的に宣伝されていたので、誰もが知っている常識として『留学生は今日学校に編入する』というものがあり、

「……………」

もう完全に人違いが確定した。周りの空気がしらける中、少女は最後のあがきに、苦しい言い逃れをしてくる。

「た、確かにあんたは常習犯じゃないかもしれないけど、今日初めて痴漢を働いたのかも……………」

「紅葉ちゃん！？　ちょ、待って！！　ちょっと待って！！」

その時、一人の少女が何とか人の壁を切り崩し、少女とシシンの間に割って入った。

「あ、明日香！！　見て、見て。痴漢捕まえ……………」

「私の話をちゃんと聞いてから犯人追いかけてよ！！　私はまだ《白い手…………》しか言っていないでしょ！！」

「え、だ、だから白い手でしょ！！　ほら、こいつの手、紙みたいに白いし……………」

「私は『白い手袋をつけていた』っていおうとしたの！！　指紋を消すための薄手の手袋！！」

「……………」

これで完全な冤罪が確定し、少女の悪あがきはついえた。そして、

「どう落とし前つけてくれるんや、コラ？」

「あ、あははは……。チョーゴメ〜ン？」

ブチっ！！

「死ね！？」

冷や汗を流しながらふざけきった謝罪をしてくる少女に、シシンは掴みかかってデコピンを数発叩き込む。満員電車の中で彼ができる精一杯の制裁だ。

そんな風に彼が少女を痛めつけている中、

「ここに手袋したおっさんがいるぞ！！」

一人の少年がそう言っ、て、一人の男を指差した！！

よくよく見て見るとそれは先ほどシシンを押しつけて、奥の車両へ行こうとしていた男。

ああ。こいつらから逃げようとしたんかいな……。

と、内心で納得の声を上げながら、シシンは無造作に高い位置に設置してある荷物を載せる金網へと手をかけた。

「え？ 何する気！？」



そんなシシンの不可思議な行動に、強力なデコピンをくらい、額を抑えた少女が顔を上げる。シシンはその少女に面倒くさそうな視線を向けながら一言、

「痴漢捕まえるんやろうが。手伝ったるわ」

瞬間、シシンの体が満員電車唯一の空白スペース、天井付近のアーチ状の空間を飛ぶ！！

「なっ！？」

腕の筋力だけで金網を支えに、体を引っ張り上げ人の頭にぶつからない高さまで足を曲げ、逃げようと慌てふためく男に向かって横方向に足を延ばすという単純動作。それによってシシンの体は慣性の法則に従い、男に向かって宙を舞った。

ごくごく単純な……それなりに鍛えていれば誰にでもできそうな動作。しかし、そんな動作でも少女や乗客たちは驚いた。

なぜなら、この国には超能力が、シシンの国には魔法があるからだ。わざわざ前時代的な体を使つての軽業を使う人間はいない。いや、魔法使いの軍人の中には今でも前時代的体術を使う人間がいるが……それにしたって、シシンが使ったようなアクロバットな軽業を使う人間はいない。そういったやつらはその場ではねて魔法で姿勢制御すれば普通に空を飛べるのだから。

しかし、シシンはそれを行い見事に男の前に着地した。幸い男の周りは、男が痴漢とばれたため、人々が嫌悪の表情を浮かべながら離れていた。そのため男の周りにはサークル状の若干のスペースが空いている。シシンが着地する場所は十分にあった。

「さておっさん。俺はさっきあんたの罪をかぶせられかけて若干機嫌が悪い。その件に関してはあんたが一切悪くないんはしつとるんやけど……まあ、とりあえず一発シバかれろや」

「うわあああああああああああああああああ！！」

若干どころかかなり機嫌の悪いシシンの言葉に、追い詰められた男は怒声を上げながら、手袋がついた両手でシシンに掴みかかる！！

「危ない！？」

突如豹変した様子の男に周りの人々は反応できない。シシンに向かって突き出された手を誰も止めることはできない！！

だが、

「遅いでおっさん。親父の拳骨はこの10倍は早い」

今思い出したらほんま規格外やな、うちの親父は……。

そんなのんきなことを考えながら、シシンは体の重心をずらし、足を曲げて体を低く保つことによつてあつさりと男の手をよける。その後、のびきつた男の手を取り、あつさりと関節を決めた後、ゴキツという音を響かせながらひじ関節を外す。

「ぎゃあああああああああああああああ！！？」

悲鳴を上げのけぞる男に対して、シシンは一切の容赦も遠慮もなく、男のみぞおちに肘鉄を叩き込みその男の肺にたまった空気を吐

き出させ悶絶させた。そして、苦痛のあまり電車内でうずくまる男の首筋に手刀を叩き込み、男の意識を刈り取る！

状況終了。その間わずか30秒。能力が使われなかった戦闘の中では間違いなく最短記録だ。

「能力使われてもあれやしな。ソッコーできめさせてもらったで」

ぶくぶくと泡を吹きながら気絶する男にそう言い、シシンは自分のハンカチで男の手首を縛り付け、絶対にほどけないように特殊な結び方をした後、

「ほらそのアホ女。お前が捕まえたがとった痴漢や。さっさと連れてけや」

面倒くさそうにそう言った。

「す、す」……」

そんなシシンに二人の少女は呆然とし、

「「「うをおおおおおおお！？」 さすが留学生！」「」」

乗客たちは歓声を上げた！！

…す…す………す…す…

「あははは。そんなことがあったのかい。ご苦労様だったね。」

「二度とごめんや。俺は平和な学園生活が送れたらそれでええ、ゆーとんのに」

ケラケラと笑いシシンの肩をポンポンとたたきながら、ひょうひょうとした雰囲気を持つ学園の校長はそう言った。その傍らではシシンが頭を抱えており『新聞に載ったりせーへんやろな?』と心配そうに眉をしかめている。

彼らがいるのは『第六学園都市立大学付属高校』の廊下。あのあと、二時間ほど事情聴取で捕まっていたシシンは、編入早々大遅刻をしてしまった。

当然そんな時間まで担任の先生が待っているはずもなく、シシンは仕方なく肩身の狭い思いをしながら職員室に入り、軽い自己紹介と事情説明のあと、校長に自分の教室へと案内してもらっているのだ。

「まあ、始まりこそショッキングだったかもしれませんが、うちの学校では早々事件は起きないので、普通の生活ができると思いますよ」

「そうやってええんやけどなあ……」

何やら先ほどから得体のしれない寒気が止まらないシシンは、校長の言葉に思わず眉をしかめた。父親の思い付きスパルタ訓練に付き合わされた長年の勘が告げている『この先……絶対ろくなことにならないぞ』と。

「ああ、つきましたよ」

そんなシシンの心配など知らずに、校長はのんきな声を上げてシシンの目の前の教室を指差した。出入り口の扉は二か所あり、一般的な引き戸。そして扉の一つには『1 - B』という典型的なクラス名が書かれている。

「では、先に入って説明してきますね」

「手間かけてスンマヘン……」

「いいですよ。事件を解決したご褒美です」

優しく笑いながら先に入ってくれた校長に頭を下げ、シシンがしばらく待つこと数分。

「入れ」

やたらと硬質な女性な声が聞こえシシンの入室を促した。

「し、失礼しまゝす」

そして、おずおずと教室に入ったシシンが見たものは、

「……」

「何をしている。さっさとこっちにこい」

にこにこ笑っている校長と、硬質な声を出す背中がピシッと伸びた老婆の教師。そして、

「……………」

何やら哀愁漂う背中で窓の外につるされた、見覚えのある少女の姿……。

「……………」

シシンはその少女　電車でシシンを痴漢と間違えた桃色短髪少女……名前は確か紅葉だったか？　をじつと見つめた後、

「すんまへん。気分が悪いさかいに早退をさせてください」

ダラダラ冷や汗を垂らしながら校長にそう懇願した。

こうして、シシンの前途多難な学校生活が幕を開けるのだった。

### 3話

「ここが第六学園都市？　はん。ずいぶんと貧相なところですよ」

やけに緑が多い第六学園都市の街並みを見て、巨大なキャリーケースを転がしながら町を歩いていた少女は鼻を鳴らす。

長い金色の髪はいわゆる縦ロール風に整えられており、いかにも『お嬢様！』といった雰囲気少女に与えている。

「まあ、いいですよ！！　ここにいる魔法使いを引き抜きできれば、さっさと第一に帰れるのですから」

わたくしの魅力ですぐに骨抜きにして差し上げますわよ。

自信にあふれた笑みを浮かべ、どこから取り出したのか全く分からないセンスを構え『ほーっほほほほ！！』と、高笑いする少女。

少女は気づいていない。周囲の人々が突然笑い出した少女にドン引きして離れて行っていることに……。

平穏だった第六の風景に完全に空気を読めないお嬢様の高笑いが響き渡る。

第六学園都市……不可思議な能力者たちが集まる学徒の都は、今日も奇人変人が絶えないようだった。

…す…す……………す…す…

「好きなたべものは？」

「好きな本は？」

「血液型は？」

「むこうに彼女とかいる？」

「どんな魔法を使えるの？」

衝撃的な登場（もつともその衝撃の発生源は彼自身ではないが……）をはたしたシシンは、昼食休みに入った瞬間に留学生恒例……クラスメイトからの質問地獄の洗礼を受けていた。

しかし、シシンはそのようなことでは一切動じない！！ 何せこの日のために、彼は予習復習を重ね、万の質問に対してにこやかな笑顔で返事を返す特訓をしてきた。今なら父親が言っていた異世界の偉人・聖徳太子みたく十人の質問に同時にこたえる自信が彼にはあった！！

まあ、そのせいで勉強の予習復習がかなりおろそかになってしまい、初めての授業は惨憺たる結果になってしまったが……。些細なことだ！！

「ちょっとあんた！！」

しかし、シシンがいざ軽快にこれらの質問に答えようとしたとき、



思わぬ横やりが入ってしまった。

先ほどまで窓の外につるされていた、あの桃色短髪少女が話しかけてきたのだ。

自分の抱腹絶倒級であろう見事な返しを邪魔されてしまったシンは、若干不機嫌そうな顔になりながら言葉を返し、

「なんや、人間テルテル坊主」

「好きでああなったわけじゃないのよ！！　というか、私の名前は花楓野紅葉よ！！　覚えときなさい！！」

あからまさに悪口を吐いたシンを、顔を真っ赤にしながら少女花楓野紅葉は怒鳴りつけた。

その光景にクラスメイトが苦笑を漏らし、紅葉はさらに顔を赤く染める。

それでも紅葉は気丈にもこの場に残った。何せ紅葉はケン力を売りに来たのではない。

「そ、その……今朝は悪かったわね」

謝りに来たのだから。

……気丈云々以前に人として当然のことだった。

「せやな。まさか編入初日から痴漢に間違われるとは思ってへんかったわ。あのまま俺がなんとも言えんと捕まっとったらどないするつ

もりやってん」

「だ、だから悪かったって言ってるじゃない!？」

せつかくの謝罪をシシンに荼化されてしまい、烈火のごとく怒る紅葉をクラスメイト達は『ドウドウ』と言いながら落ち着かせに行く。どうやらこういった光景はいつものことのようにだった。

「普段はあんなんじゃないんだから!! 私はこちら見えても《法律ル》内でも注目されている期待の新人で……って、みんなどうして目をそらすのよ!？」

何やら言い訳をはじめた紅葉の言葉に、彼女を落ち着かせようとしていたクラスメイト達は思わず目をそらす。その態度が、彼女の現在の信用度を如実に語っていた。

「まあ……がんばってはいるよね」

「評価には値するだろ？」

「まだまだこれからだから……がんば」

「みんなのバカああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

クラスメイトからかけられた無数の励ましに、涙目になった紅葉は、ドアをバンつとあけ、凄まじい勢いで逃げに行った。

「あはははは……なかなかおもしろい奴みたいやね？」

おかげで出番くわれてもうたやん。クソ……。

クラスメイトの興味がシシンから泣きながら出ていった紅葉に移ったのを見て、シシンは若干残念そうにしながらも、昼食をとるために弁当を取り出した。

そんな彼の隣に、一人の少年がやってくる。

「留学早々厄介なのに絡まれたな。留学生？」

にやにや笑いながら近くにあった机を動かし、シシンの机の正面へと移動してきたのは、明らかに染めたと思われる不自然な赤毛に、青いグラサンをかけた、詰襟のボタンを留めずに大きく前を開け赤いＴシャツをのぞかせた少年。首に大量のシルバーアクセサリーを下げて若干威圧感を出している。

形から入りましたー！！　といわんばかりの不良スタイルに若干驚きつつ、シシンはわざとらしくぶすつと頬を膨らませて見せた。

「そーやねん。あいついきなり俺のこと捕まえて痴漢扱いしよってんで！？　ひどない！！」

「なんだよ。そのていどだったの？　俺なんか殺人犯に間違われたことがあるぜ。まあ冤罪だったんだけど」

「結構シャレにならへんぞ、それ！？」

少年の言葉は、シシンにとっては到底看過できるものではなかった。少なくともこいつが殺人犯に間違われるような事件（おそらく殺人事件）が起こったということだし、それに思いつきり冤罪をか

ぶせたやつが野放しになっている。シシンのツツコミも当然のことだろう。

「まあ、わるい奴じゃねえんだよ。ただちよつとやる気が空回りしてるっつーか？ 猪突猛進っていうか？ 単細胞ってーか？ バカなのか？ あれどれだっけ？」

「知らんけど？」

言葉の迷宮に入り込んでしまった少年に三白眼になりながらツツコミを飛ばしたあと、シシンは苦笑を浮かべた。

「あゝあ。俺ボケのポジションねらつとったんやけどな。こんな天然が仰山おるところやつたらおれツツコミするしかないやんか？」

「そんなこと考えているやつなんて初めて見たぞ……。え、なに？ お国の風習か何か？」

若干顔をひきつらせながらそう言った後、少年は「とりあえず……」といいながら右手を差し出し、

「ようこそ。第六学園都市立大学付属高校『1-B』へ。俺の名前は<sup>あたらしけんこ</sup>丁嵐健吾だ。気軽に《アッチ》って呼んでくれ！」

「気軽には呼ばれへんけど……了解や。善処する。松壊シシンや。よろしゅうな」

シシンは前に突き出された手をがっちりととり、握手を交わす。

こうして、シシンの学園生活は始まったのだった。

### 3 話（後書き）

二本連続とうとう

## 4話

「ふん。これがうちに来た留学生の資料ね……」

第六学園都市の守りを任されている第六学園都市《法律<sup>ルール</sup>》支部・局長真玉紗奈は眉をしかめ、ため息をつきながら資料をめくっている。

やたらと上等ないすや机が並べられた《法律<sup>ルール</sup>》事務所内部には、今は彼女しかおらず、若干傾いた日差しが差し込む窓の外からは昼休みに校庭に出てたわむれている生徒たちの嬌声が響き渡っていた。

紗奈はその声を聴いて、少し頬を緩めはしたがそれでも険しい表情は崩れなかった。

それだけ、彼女が見ている報告書は問題だらけだったからだ……。

「まさかこんな留学生がうちに送られてくるなんて……。第一……もしかしたら本社からの嫌がらせでもうけているんじゃないかしら？」

本社……この国を実質統治している大財閥 六花財閥の工作を疑いながらも、紗奈は黙々と資料をめくっていった。

《松壊シシン：魔術宗派・陰陽道

系譜・松壊一族（英雄シオンの一人息子）

備考・生まれながらの色素異常持ちだが、《松壊一族》の特性によってほとんど健康体と変わらない。注意事項としてほかの生徒に一族の体質を見られると若干の不和が生まれる可能性があるため、極力みられる可能性がある状況を作るべきではない。

彼自身の強い希望で第六学園都市へと編入。超能力開発は積極的に行うこと……》

などなど、事細かに彼のステータスが連ねられており、「よくもまあこれだけ調べたな……」と、若干の呆れを含んだ関心の声を漏らしつつ、紗奈は少しだけコーヒーを口に含んだ。

そして、シシンの報告書に添付されてついでにきた、もう一枚の書類に彼女が目进行落とそうとしたとき、

「センパアアアアアアアアアイ!!」

部屋の前の廊下を、聞き覚えのある声が、ドッブラー効果を伴って近づいてくるのを聞いて紗奈は思わず額を抑えた。

なんでこんな時に限ってくるかなあもう……。

聞こえてきた声と、勢いからしてやってくるのは花楓野紅葉だろ  
うと辺りをつけた紗奈は、めんどくさそうにイスから立ち上がり  
ながら彼女を迎える準備をするために、精神鎮静作用があるハー  
ブティーを入れる。

紅葉は、第六学園都市にはある事情で五人しかいない《法律<sup>ル</sup>》のメ  
ンバーの一人なのだが、そそっかししく失敗が多いことで問題児と  
して認定されていた。

実力は折り紙つきな強力な能力者。そのクラスも堂々のクラス4  
と能力数値だけ見れば文句なしのエリートだ。

そう……能力だけなら。

再び紗奈が大きなため息をついて若干顔を俯けたとき、ようやく声の人物が部屋の前にたどり着き勢いよく《法律<sup>ルル</sup>》支部のドアを開けた。

「先輩！ 聞いてくださいよ！！」

「とりあえず落ち着きなさい紅葉……。あなたの悪いところはすぐに熱くなってしまうところよ？」

今にも食って掛かってきそうな気迫を滲み出させながら、自分の方へ走ってくる紅葉を見て紗奈は三白眼の視線を飛ばしながらハーブティーを突き出した。

そんな紗奈の平坦な態度にのまれてしまったのか、紅葉は思わず体をのけぞらせ、突き出されたティーカップを回避し、

「あ、ありがとうございます……」

少しづつが悪そうな顔をしてそれをうけとった。どうやら自分のテンションがおかしな方向に行っていたことは自覚していたようだ。

それを満足げに見つめた後、紗奈は再び執務机へと戻りハーブティーを口に含む。

「それで？ 今度はいったいどうしたの？ 昼間の冤罪事件の処理はもう片付けたけど？」

「え、冤罪じゃないです！！ 痴漢事件です！ ちゃんと犯人捕まえました！！」



「それと並行して冤罪事件も犯したでしょうに……。あれだけの目撃者がいた中でごまかせたとも思っていたの？」

「うう……」

紗奈の冷たい言葉に、紅葉は頬を膨らませながらティーカップを両手で包み込むようにもってハーブティーをすすする。

「でも、クラスみんながひどいんですよ！！まるで私を使えない子みたい……」

「実際使えないでしょ貴方……。あなたが検挙してきた犯人の中で冤罪率が八割切っているんだけど？」

「……」

旗色が悪くなってきたためか、若干視線を窓に向けながら遠い目をして現実逃避する紅葉に、紗奈は大きく嘆息をし、一気にカップをあおった。

まったく……この子は本当に子どもね。なんで高校生やっているのかしら？

本人が聞けば先輩後輩なんてものは無視して飛びかかってきそうなことを考えながら、紗奈は空になったカップを受け皿に置き、先ほどまで目を落としていた資料を執務机にぶちまける。

「ただでさえ問題児がいるのに……この上さらに二人も増えるなんて……今年は本当に厄年ね」

「その問題児って私のことですか……って、ふたり？」

「ええそうよ。一人は今朝貴方と一悶着起こした転校生と……」

紗奈がそうつぶやきながら指をさした書類には、信じられない人物の顔写真とデータが張り付けられていて……。

「第一学園都市の切り札の一人……クラス5《弹幕皇女》　レイ  
ンベル・ヒルトン。幻の大陸から渡ってきたなんて眉唾物の伝説を  
持っている家系の末っ子様よ……」

自信あふれる笑みを浮かべた金髪縦ロールの髪が特徴的なその美少女の写真に、紅葉の顔が思いつきりひきつるのを紗奈はため息交じりに見ていた……。

…ナ…ナ…………ナ…ナ…

紅葉が泣きながら教室を出て行ったあと一通りの紹介を終えたシンは、丁嵐に連れられて廊下を歩いていた。

「どうせ食べるんだったら学校の案内がてら学食行こうぜ？」という丁嵐の提案にシンが乗ったからだ。

（まあ……卒業するまでお世話になる学校やし、早いこと構造知つとくんは悪いことやないやろ）

今回の留学生はかなり特殊な形で行われており、留学期間は計三年。高校時代を丸々違う大陸で過ごすことになっている。

これは、次世代の魔法使いたちに対外国である日ノ本を第二の故郷のように思わせることによって次世代の外交をより円滑に進めるために考案された留学制度で、今回のことがうまくいけば数年おきにこういった長期留学の機会を設けるつもりだと天草の政府連中はいつていた。

シシンは基本的にバカなので何を言っているのかはあまり理解できなかったが、同じくそれなりにバカな父親が「ようするに、楽しんで来い」と気をきかせて噛み砕いて言ってくれたのでそうすることになっている。

「それにしても人多いな？ 昼っていつつもこんなもんかいな？」

階段を使って食堂のある階に降りたシシンは、その階を埋め尽くすかのような人の山に目を丸くした。

「うちはマンモス校の割に学食ちつせえしな……。昼になると学食組でこの階はあふれる。何度も何度も学食増やすように申請してんだけど、上の財閥が予算下ろしてくれないらしい」

「なんでや？」

「うちの第六学園都市は個性的な能力者は多いけど、高レベル能力者が少ないしな……。冷遇されてんだよ」

「ああ……。親父から聞いたことあるわ。学園都市間の格付けやつたっけ？」

「そうそう。高レベル能力者が多い学園都市ほど予算が大量に回されて、うちみたいな不良……能力クラスが低い奴らが集まる学園都市はこうしてひもじい思いをすると……。まあ最近実験で事故を起こした第三学園都市よりかはずいぶんとましだけだな」

ふうん。と、健吾の解説を理解したシシンは『学園都市もいろいろと面倒なしがらみがあんねんな』と苦笑を浮かべながら、人ごみをかき分ける健吾についていく。

シシンの頭上には人ごみにつぶされないように両手で掲げられた弁当があった。どうやらそのせいで人ごみをかき分けることができないようだ。

「ちなみに学食ってこの先ドンくらいなん？」

「安心しろ！！ ほんの20メートル先だ！！」

「なあ……学校抜け出して近くのコンビニ行った方がはやない？」

20メートルもこの人ゴミをかき分けなといけないと聞き、やげんなりとなるシシン。健吾も否定はしないのか、そこはかたくなくうんざりしたような表情を浮かべて何度か頷いた。

だが、

「学校抜け出すのは至難の技だろ……。うちの学校、学歴そんなによくないからせめて授業だけはちゃんと受けさせようってさぼり防止のために……」

その時だった、

「道を開けなさい庶民たち！！ 高貴なワタクシが通りますわよ」

やたらと傲慢な声が聞こえたのと同時に、

「「「「「ぎゃあああああああああああああああ！？」  
「「「「「」

突然学食付近で爆発が起き、そこにたまっていた人だかりが吹きとんだ！！

「「なっ！？」」

あまりに異常すぎるその光景に、思わず固まってしまうシシンと健吾。

当然学食に入るためにたまっていた人だかりを構成する人々も見事に固まり、その爆発を起こした人物を凝視した。

「庶民たちが血眼になって入っているからどんなおいしい料理が出るのかと思い入ってみれば……しょせん第六は第六ですね。しみつたれたものしかメニューにありませんでしたわ」

「お嬢様……だからと言ってこのような……」

「御安心なさい黒江<sup>クロエ</sup>。手加減は致しました」

爆発の煙を切り裂きながら洗われた、ド派手な金髪を縦ロール型の上方にまとめた美少女は。羽毛が先端についたセンスを動かしながら先ほどの爆発で吹き飛んだ生徒たちを一瞥する。

そこにはまるでギャグ漫画のように黒こげになって気絶している  
無数の生徒たちが倒れていて……。

「ただのスタンモードです。コマが変わればドリフ爆発ヘアで再登  
場できますわ」

「お嬢様……現実と漫画のギャグ補正をごっちゃにしないでくださ  
い」

お嬢様然とした見た目には似合わないセリフを吐いた縦ロールに、  
後ろに影のように付き従っていた黒髪黒目の美少女は心なしか困っ  
た雰囲気を出す無表情で、ツツコミを入れる。

「さて……さつさと留学生とやらを探しましょうか？ お退きなさ  
い庶民たち。この方たちのようにになりたいのかしら？」

そんな美少女のツツコミを一向に意に介した様子もなく、縦ロー  
ルはその周囲に光の球体を無数に出現させて、たまっていた生徒た  
ちにそう脅しをかけた。

一瞬の静寂。そして……

「なんでこんなところにいるんだよ……」

「？」

健吾のつぶやきを合図にしたかのように、生徒たちはまるで濁流  
のように移動を開始した――

「ちよ、ちよ！？　　なんやあれ！？　　いつたい誰やねんあの嬢ちゃん！？」

「アッチーつえつつたろうが!! 知り合いじゃねーけど有名人だよ! 日ノ本に六人しかいない学園都市所属クラス5の一人にして、《第一学園都市》<sup>きそくきどり</sup>が要する二人のクラス5の一人……《弹幕皇<sup>ガトリ</sup>女<sup>シゲ</sup>》  
レインベル・ヒルトン!!」

シシンが落ちて着いて健吾の話が聞いたのはそこまでだった。

恐慌に陥った人の波がとうとうシシン達がいたところまで到達し、シシンと健吾を飲み込んだからだ！

「つて！？ シシン！？」

「のわっ！？ うええええええええええ！？」

朝の電車で驚異的な身体能力を見せたシンでも、これだけ密着して移動する人の波の前ではなすすべもなかったようで、あっさりと人に流され押し倒され踏みつけにされる。

「いたたたた！？　ちょ、イタイイタイ！？　ふんどるふんどる！？」

「シッ！シッ！シッ！……！」

まるで今生の別れでもするかのように悲痛な声を残して人ごみの向こう側へと消える健吾。当然踏みつけにされているシシンにそんなこと気にしている余裕はなく、とりあえず骨だけはおられないように適当に身をよじりながら、なんとか人の足によって演出される

地獄を耐え忍んだ。

そして数分後……。

「いやいや……俺やなかったら軽く死んどるで、これ……」

人々の波が完全になくなった後、何とか無事にあの地獄を切り抜けたシシンは、うんざりした様子で体を起こしその場に座り込む。

「うわ……これクリーニング代学校が出してくれへんかな……」

そして、漆黒の詰襟についた無数の足跡に、泣きそうになりながらシシンはあたりを見回した。自分をここまで案内してくれた気のいい不良もどきの姿を探しているのだが……。

「健吾は……。まあ、流されたわな……」

しゃーない一人で飯食うか。ホンマ転校初日から災難続きやで……。

そうこぼしながらシシンはもう一度辺りを見回してみた。今度は純粹に弁当さがし。

そして、シシンは見ってしまった。

「あ……」

無残に踏みつぶされ、中身が漏れ出し、それすらボロボロにされてしまった渾身の力作だった弁当を。

「あら？ まだ人が残っていらっしやいましたの？」



「あ、お嬢様この人……」

入学初日だったから、父親の飯を作らなくてもよくなったから、心機一転気合を入れたかったから、これからは厄介ごとに巻き込まれませんかようにと願をかけたかったから……。

様々な理由が重なり今まで以上に気合が入ったで木となったシシン渾身の出来の弁当は、わけのわからない理不尽な縦ロールの登場によってあっさりとおつぶされてしまっていた。

「この人……私が言っていた留学生有望株の人ですよ？」

「なんですって!？」

材料を厳選して作ったエビフライ。彩り豊かにと思い入れたプチトマトと彩り豊かな野菜のサラダ。大好きなから揚げに、渾身の出来で炊き上げることができたふりかけ装備のごはん。そして、お気に入りのソースを詰め込んだ小さなプラスチック容器。

それらすべてが無残に美踏みつぶされ、グチャグチャのメチャメチャになってしまっていて……。

「ああ……」

シシンの顔から表情が消える。

「あなたが『第六』の転校生ですね!？ 知っていると思います  
がわたくしの名前は『弾幕皇女』<sup>ガトリング</sup>レインベル・ヒルトン。今日からあなたのご主人様になる……」

縦ロール……ことレインベル・ヒルトンが何か言いだそうとしたのを聞き、シシンの怒りゲージはマックスを迎えた！

「やかましいわ、この金ぴかクロワッサンがあああああああああああああー！」

ブチリ……という音共に、シシンが絶叫を上げる！ それはもう凄まじい絶叫で、冤罪をかけられた時以上に怒りをその絶叫からは感じられた。

「なっ！？ く、クロワッサン！？」

「ブツ……！！」

人がいなくなった廊下を優雅に進んできて、へこんだ様子で座り込んでいた留学生を見つけて声をかけたレインベルは、突然パンの名前を自分につけられ絶句する。

おまけに、後ろに待機していたお供の少女はその呼称がツボっただらしく、思わず吹き出してしまっていた。

その少女に『あとで覚えておきなさい！！』という意味合いがこもった殺気だった視線を飛ばした後、レインベルは怒りに燃えるシシンを睨みつけいつものように高慢な言葉を吐き出した！！

「しょ、初対面なのにずいぶん失礼な呼び名を使われますわね、留学生。最近の天草では人のことを蔑称で呼ぶのが流行りなのか」

怒りに震えながらも何とか優雅さを取り持ちかつ大量に侮蔑を含んだレインベルの言葉。しかし、シシンはそんなこと一切意に介した様子も見せず、レインベルに負けず劣らずの怒りに燃える瞳を彼女にぶつけ、地を這うような低い声をだした。

「やかましいわ。おのれは今最も手えだしたらアカンもん到手え出したんや。たとえ己のクロワッサンが某パンの人みたいに引きちぎって食べさせることによって、人に愛と勇気を与えるもんやったとしても、この所業は許されへん……」

「ワタクシの髪はクロワッサンではありませんわよ!!」

「ぶふあ……!!」

「黒江!! あとで覚えておきなさい!!」

もう我慢の限界とばかりに、レインベルに背を向け地面に膝をつきバンバンと床を殴って爆笑する黒い美少女……黒江に、もう泣きそうな顔でレインベルは怒声を上げた。

そんな二人の漫才など知ったことではないといわんばかりに、シシンは怒りに満ちた声で絞り出すように言葉を発する。

「決闘やクロワッサン!! おのれに今日の行いを後悔させたるわ!!」

「いいですわ!! ここまで侮辱されたのは生まれて初めてです!! 転校生とは言え所詮は第六に配属される落ちこぼれ……格の違いというものを見せつけて差し上げますわ!!」

そういつて、視線をぶつけあい火花を散らすシシンとレインベル。

騒ぎを聞きつけてやってきた紅葉と紗奈はその光景を見て、弱りきった視線をお互いに交わした。

間に合わなかったか……と。

#### 4話（後書き）

なんか人気ありませんねこの小説……

## 5話

「で？ いったいどうすんのよ！！」

時刻は夕方を回り、部屋に差し込む夕日が室内をオレンジ色に染める。

校庭を何組かの生徒の塊が、騒がしく会話をしながら横切っていく。大方この後どこに遊びに行くかとかそういった相談をしているんだろう。

こんなことにならなかつたら、私もあの輪の中に入れていたかもしれないのに……。

そんな気持ちを言外に含めながら、窓の棧にもたれかかりながら怒鳴り声を上げる紅葉に、応接用の机の隣の置かれたソファアに座っているシシンは思わず冷や汗を流す。

「い、いや……。確かに今回は頭に血イのぼらせた俺が悪かったけど……」

俺だけが悪わけちゃうやんか……。

そんなシシンの正論は、やたらと頑丈そうな《法律<sup>ルール</sup>》委員長のシステムデスクに座りながら頭を抱えていた紗奈によって粉碎される。

「相手は《第一》のクラス5……どれだけ私たちが相手のことを訴えようとも、そんなものはなかったことにされるわ」

「そ、そんなにすごい奴なん？ クラス5って？」

シシンのその問いに「何このめんどくさい奴？」とあからさまに瞳で語りながら、紗奈は騒ぎを聞きつけてシシンの付き添人として現れた健吾を睨みつけた。

「え、えっと……クラス5についてはどこまで知っている？」

さつさと説明しろ……。紗奈のいら立ち交じりに視線に気圧された健吾は、若干その場から後ずさりながらシシンにそう切り出した。

「もちろん知つとるよ？ うちの学年のクラスの組数……冗談やら紅葉、とりあえずそのコブシはしまってくれへん！？ えっと……超能力者の強さの等級の最上位やろ？ 0～5の順に強くなつていって……クラス5になつたらうちの大陸の雑兵で構成された軍隊を単騎で迎撃できるそうやんか？」

「それだけじゃなくクラス5には希少価値つてものが付く。だから六花財閥はたとえ罪をもみ消してでも、そのクラス5達を保護するんだよ」

「希少価値？ そんな珍しいもんなん？」

シシンの問いに答えたのは、電話片手にクラス5との決闘を何とか回避できないかと方々に手を回している紗奈ではなく、窓際から離れ短い髪をガリガリとかいた紅葉だった。

彼女はシシンの方へ近づいていき、シシンと机を挟むように向かい合うつと、目の前の机をバンと叩く！

「あんたそんなことも知らないの！？ 私たちの大陸……正確には六花財閥が超能力研究を初めてから確認されているクラス5は全部で12人。うち、いま生きているのはたったの7名。現役で学生している人間となるとさらにその人数は減って《氷河時代》<sup>アイスエイジ</sup>《金剛力士》<sup>ガトリング</sup>《弾幕皇女》<sup>リンフォーサー</sup>《王命鼓舞》の4人になんのよ！ 覚えておきなさい！！」

「ここテストにでるわよ！！ ああ、ゴメン、ふざけんと聞くからそのコブシは納めてくれへん！？」

「しかも、残った大人の三人も曲者で……一人は数年前に行方不明一人は隠居を決め込んで自分の能力使って惑星が滅んでも生き延びられる自閉空間に引きこもり。最後の一人に至っては六花財閥会長の秘書頭でこの大陸のすべてを知っているらしい……。前のはともかく、後ろ二人は能力の規格外さがうかがえる感じだろ？」

肩をすくめながら説明を締めくくった健吾に、シシンはガクガクと首を縦に振って肯定を示す。

惑星破壊にも耐えられる自閉空間に引きこもりって……そんなのうちの国長たちでもできるやつがいるかどうかや……。

自分の国の六人の怪物たち（ちなみにシシンの父親のこの中に入っていたりする……）を思い出してしまい若干の鬱が入るシシン。留学前に『お前超雑魚なんだって？ だったら俺らがみっちり鍛えてやるよ』とか言いながらいじめに近い修行（笑）をやらされた記憶がフィードバックする。

まあ、その修行の成果はまったくでーへんかったけど……。何せあの人たち、俺を魔法関連で強くしようとしたし……。



ここにくるまでのいじめの日々に若干遠い目をするシシン。しかし、そんな彼を放置し健吾の話を進んでいく。

「第一学園都市にはさつきあげた四人のうち二人のクラス5が所属してんのよ。《氷河時代》<sup>アイスエイジ</sup>とさつきの《弹幕皇女》<sup>ガトリング</sup>ね」

「キタ

(。・。)

!!!!!! ちょ!

? 何きよとんとしとんねん!? 滑ったみたいやからやめてんか!? 弹幕ゆーたらこれやろうが!？」

「お前もう立派なボケ役だよ……。あとそのスケブはしまえ。邪魔だ」

シシンが突然掲げた、どこから取り出したのかわからないF0のスケッチブック。そこにやたらと達筆な筆使いで描かれた某弹幕の顔文字にイラッときた健吾は、シシンからそのスケッチブックを奪い取りペイツと窓の外に捨てる。

その際シシンは「俺のネタ帳がああああああ!？」と悲鳴を上げていたが、紅葉と健吾は、今は気にしない方向で行くことにしたようで、全力で、泣いているシシンを無視した。

「まあ、そんなわけで前話した学園の格付けは当然のごとく第一がトップ。そのせいかあその生徒はほかの学園都市出身の奴を見下す傾向があつてな……。大体の生徒があんな感じ?」

「おまけにそれをしてとがめられないということが分かっているせいか、かなりたちが悪いのもいるわよ? あの人はまだましな方だわ」

あれでまだましかな……。

紅葉から伝えられた信じられない一言に、ひきつった笑みを浮かべつつシシンは紗奈の方を向いた。

「まあ……要するにあれやろ？ 俺がチヨウシのつたからシバかれると……」

「頭悪そうに言ってしまえばそうなるわね……。というか、理不尽だったとは思うけど弁当の一つや二つくらい我慢しておきなさいよ。おかげで明日私たちはあなたの焼死体を片付けないといけないことになったのだけれど？」

「俺死ぬこと確定何なん!？」

「むしろ真剣に勝てると思っているの？ あなた自身がその事実を一番よく理解していると思うけど？」

「……」

紗奈にそう言われて、シシンは少し目を見開いた後、

「ああ……。まあ、勝てる自信はないけどもな……」

若干の自嘲を浮かべながら『どないしょ……』と言わんばかりの表情を浮かべながら頭をガリガリとかく。

「え、でもシシンは英雄の息子なんだろ？ だったらなんとか打開策ぐらいはあるんじゃないのか？」

さすがにあれだけの啖呵を切ったあげく無策とは思っていないかったのか、健吾がツツつと冷や汗をかきながらひきつった顔でそう尋ねてくる。

それと同時に即座に健吾がから顔をそらすシシン……。ちよつとよくシシンを観察してみると健吾以上の冷や汗をかいていることが容易に見て取れた。

「……おい。まさかマジでなんもないのか？」

「なんもないどころの話じゃないわよ……。この子魔法使いですらないんだから……」

「はいっ!？」

紗奈の呆れきった声にびくりと震えるシシン。それを見て紅葉は思わず紗奈の方を振り向いた。

そこで紗奈は昼休みに見ていたシシンの個人データを健吾と紅葉によく見えるように掲げてみせる。

「その子は生まれながらに魔力がなくて魔法使いになれない落ちこぼれだったんですって……。だからこの子はここにきて超能力者になろうとしたのよ」

紗奈の信じられないくらい絶望的な言葉を聞き、石像のように固まる健吾と紅葉。そんな二人の様子と、『いやゝ。ばれてもったゝメツチャ照れるわゝ』と状況わかってんのかと言いたくなるくらいあっけらかんとした笑みを浮かべたシシンの様子があまりに対照

的すぎて、紗奈は再び大きなため息を漏らすしかなかった……。

…す…す………す…す…

「魔法が使えないですって!？」

「はい」

夜の第六学園都市。そこにある最も豪華で巨大な学生寮にそんな間の抜けた声が響きわたったのは時計が11時を回った時だった。

そこにいたのはやたらと豪華なフカフカソファーに身をゆだねているバスローブ姿のレインベルと、彼女の髪を寝やすいようにセツトしておしているメイド服装備の黒江だった。

さすがに寝る時までシシンに『クロワッサン』と揶揄された髪型をするつもりはないのか、今のレインベルの髪型は至って普通の金髪ストレートだ。

「あ、あの庶民……わたくしにケンカを売っておきながら何の異能ももっていないのですか黒江!!」

「はい。我が天草では結構有名でしたよ? 『トンビが鷹を生むならぬ、トンビが烏を生んだ』って」

「烏を馬鹿にしてはいけませんわ。彼らは意外と賢いですよ?」

「お嬢様……今はそんな話していません。ほんとにお嬢様は空気読めませんね」

「相変わらず口が悪いですわね……」

「治しましょうか？」

「けっこう。もうあなたの口調になりましたから今更治されるのも不快ですわ……」

レインベルの言葉にほんのりと笑みを浮かべた後、髪の設定が終わった黒江は若干濡れているレインベルの髪を、ドライヤーを駆使して丁寧に乾かしていく。

「ですが……私が今回の留学生で最も優秀だと思うのは彼ですよ」

「……それは、なぜですか？」

今まで黒江が与えてくれた情報に間違いはなかったため、レインベルは黙って髪を乾かされながらその理由を尋ねる。

「私たちの魔法と超能力の違いはいつたいなんですか？」

「いまさらその質問ですか？ 数年にあなたが教えてくれたではありませんか。1・魔法は超能力と違って魔力という弾数があること。2・超能力とは違い異常なまでの汎用性があること。宗派によって得意魔法に偏りはありますが、超能力よりかは汎用性が高いんですよね？」

「はい。魔法は拾得さえしてしまえば大抵のことはできる優れたものですから。そこでお嬢様に質問です。魔法さえあれば何でもできる文明に魔力を持たない状態でお嬢様が生まれたとしたら、いったいお嬢様は何ができますか？」

「それは……」

レインベルは先ほどと同じように答えようとして……言葉を詰まらせた。

何ができる？ あちらの文明は魔法……すなわち魔力がその身に宿っていることが前提ですべての話が進んでいく。それが当然のことだし、それ以外の選択肢なんて存在しない。

こちらの留学生が天草に馴染めずすぐに帰ってくるのはそこらへんが原因だったりするが、今は関係ないので割愛。

何ができるか……。何ができるんですか、

「何もできませんわよ……」

あっさりとしたどり着いたその答え。考えれば誰でもわかる単純なこと。しかし、その答えにレインベルは戦慄を覚える。

だったら……だったら、あのシンシンという少年はどうやってこの年まで天草で生きてきたというんですか！？

「彼は足りないことを知る人間です。自分が何よりも誰よりも足りないことを知っています。『魔力がないから』『魔法の才能がないから』すべてが魔法で片づけられるあの大陸で、彼は誰よりも足り

ない人間でした。だから彼は……その足りないものを努力で補ってきた」

魔力で走る自動車を動かせないなら両足を使つて自転車をこぎ、魔法を使つて簡単にこなせる宿題を何日もかけて予習復習して必死に記憶し、魔法を使う相手にケン力を売られたら自分の体と頭を使い、工夫を凝らして撃退する。

そんな生活を彼は続けてきたのだ。

「ですから私は……お嬢様と彼に会つてほしかった。今すべてを失いかけているお嬢様に……彼はいい影響を与えてくれると思いますよ？」

黒江の言葉に少しだけ眉をしかめながら、レインベルはしばらくの間口を閉じ押し黙る。そして、ソファアの目の前に置いてある手紙を手に取りそれを電灯の光にかざしながらため息をついた。

「本当にそうだったら……いいんですけど」

その手紙は赤い蠟で封がされており、一つの刻印が刻まれている。

《第一》という文字がデフォルメされたその刻印を見て、レインベルは悔しそうに唇をかむのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3692y/>

---

インモータルツ!!

2012年1月8日22時48分発行